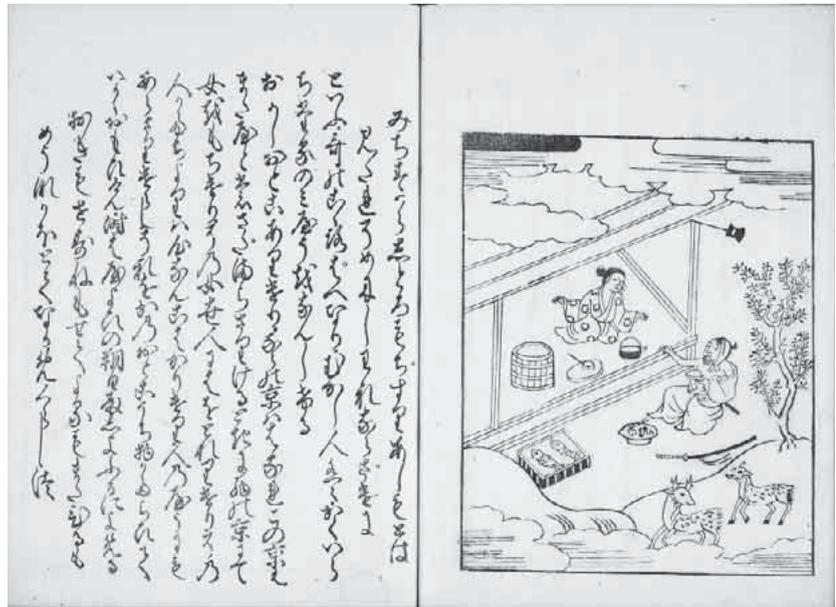


伊勢物語の遊戯

江戸時代はパロディの時代であった。その中でも、古典類が出版文化の上で花開いた十七世紀は、『枕草子』をもじった『犬枕』、『尤之双紙』、『徒然草』をもじった『犬つれづれ』などが出て、そして日本文学史の上でも最も優れたパロディ文学『仁勢物語』が登場する。パロディ文学の流行は、散文の小説類（仮名草子）に限った現象ではなく、とくにこの十七世紀には、俳諧・狂歌・漢詩文にも及び、ジャンルを超えた流行を見せていた。まさに「パロディの世紀」といってもよい時代であった（今栄蔵「パロディの世紀」『初期俳諧から芭蕉時代へ』笠間書院、二〇〇二年）。

そして本テーマで展示している『伊勢物語』のパロディ『にせものがたり』『いくの、さうし』『戯男伊勢物語』は、それぞれ『仁勢物語』の影響を強く受けつつ、新たな『仁勢物語』をめざした作品群で、その影響は明治初期まで続き、版本『仁勢物語』自体の需要も明治時代にまで及んだのである。

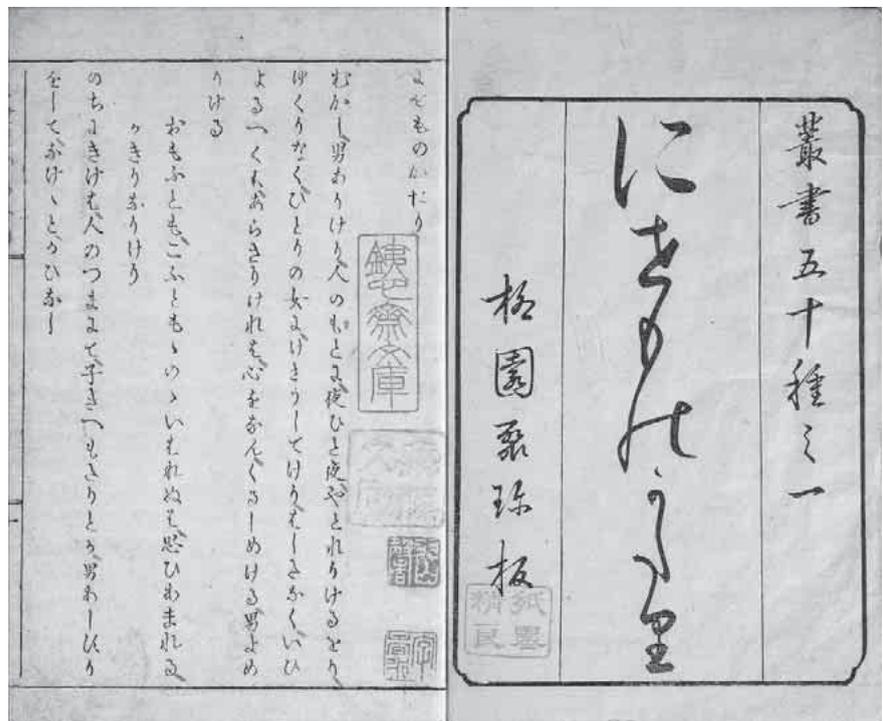
「九八―九五六」
〔寛永（二六二四〜四五）末頃〕刊本の改刻本
二六・〇×一九・〇 糧袋綴 大本二冊



『伊勢物語』を逐語的ちくごてきにもじったパロディ文学の最も古いもので、かつ最もすぐれた作品。成立は寛永十七年（一六四〇）年以前。仮名草子。冒頭は「おかしおとこ、ほうかぶりして、ならの京かすがのさとへ、酒のみにいきけり」と始まる。「むかし男」をもじった「おかし男」が登場し、『伊勢物語』の雅びな世界を、近世的な卑俗な世界に置き換えて、江戸の社会を描き出している。展示資料は京都村上勘兵衛の刊記をもつ第三次本。鉄心斎文庫には、「鹿田松雲堂蔵版書目（略）浪花書林 大坂東区安土町四丁目 鹿田静七」の奥付をもつ明治期の印本も所蔵され、『仁勢物語』の需要が長く続いたことを物語る。図録8。

（二二又）

「九八―九八八」
明治二年（一八六九）刊
二二・五×一五・三 糧袋綴 半紙本一冊



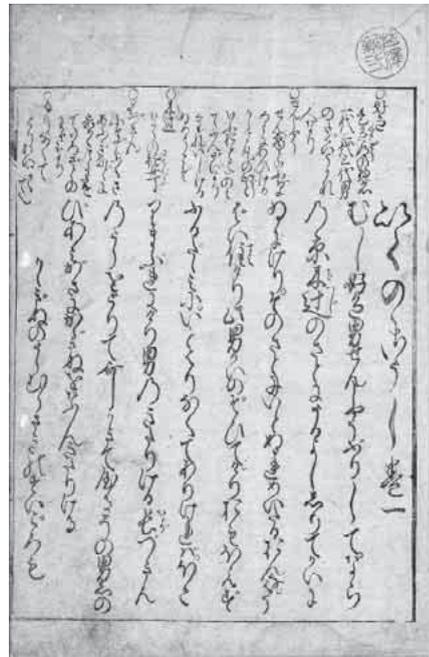
作者柳河春三やなぎがわはるさん（一八三二〜七〇）は洋学者、新聞人、開成学校教授。『西洋雜誌』せいようざっし（日本初の雑誌として知られる）や『中外新聞』ちゅうがいしんぶんの発行に携わった。本文は整版ではなく木活字印刷で、はんしょくじよ 蕃書調所・ようしょくじよ 洋書調所刊本と同活字が用いられている（後藤憲二『近世木活統紹 下』青裳堂書店、二〇一〇年）。仮名草子の『仁勢物語』とは全くの別本で、新たに『伊勢物語』を模倣した作品。「むかし男ありけり」「むかし女ありけり」で始まり、新たな男女の恋愛物語の世界を創作する。仮名草子の『仁勢物語』の影響力の強さが窺える作品である。東京上州屋摠七版。図録8。

（二二又）

「九八―九六四」

元禄七年（二六九四）刊

二二・二三×一五・五種 袋綴 半紙本四冊



貞享三年（一六八六）仲春刊『好色伊勢物語』（京都・永田調兵衛、江戸・西村半兵衛相版）の改題本。酒楽軒の序と目録を掲載した首巻を省き、挿絵を一部削除する。本文にも一部改刻部分がある。鉄心斎文庫本には、巻四に「首書／俗註 好色伊勢物語 入 四」とある初版本の題簽が残る。「むかし男」を「むかし好色男」と置き換え、好色男が遊女や素人女と遊ぶ好色物の浮世草子。貞享二年刊『首書／新抄』伊勢物語』の体裁にならって頭注欄を設け、当世語に俗注を付す。挿絵には、松の木やその他の植物類や鹿など、どこかしらに『伊勢物語』の雅なる面影を付け加えている。図録8。（二二又）

「九八―九五二」

延宝六年（二六七八）跋刊

二七・三×一八・八種 袋綴 大本二巻四冊



第二冊目に「新／撰いせ物語平調注釈（上之二／絵入）」の原題簽が存する。上之一見返し・一丁表の口絵上部に「伊勢物語ひら言葉」とある。内題「業平昔物語」。著者紀暫計は美濃大垣の人。「ひら言葉」とは、平易なことばで説く意で、『伊勢物語』を逐次にわかりやすい俗言で意識したもの。『伊勢物語』の大衆化に寄与した注釈書である。本書は先行の注釈書、とくに『伊勢物語闕疑抄』を種本として、指摘されている（今西祐一郎校注『通俗伊勢物語』解説、平凡社東洋文庫、一九九一年）。菱川吉兵衛（師宣）による挿絵は、嵯峨本以来の伝統的な『伊勢物語』版本挿絵の図柄をほぼ踏襲する。江戸柏屋与市郎版。（二二又）

競伊勢物語

「九八一—九八四」
安永四年（二七七五）刊
二二・四×一五・六 糧袋綴半紙本一冊（存卷上）

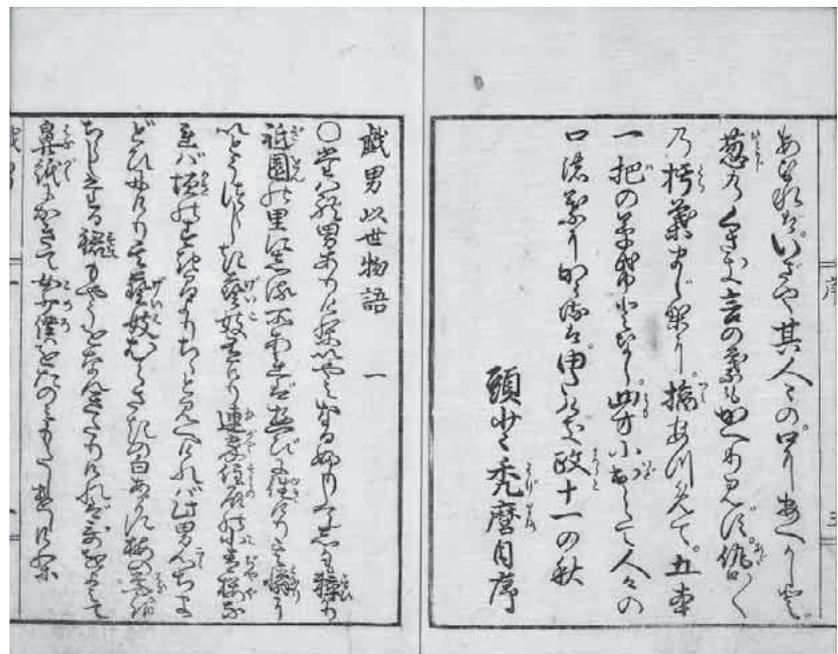


安永四年四月五日より大坂中の芝居嵐松治郎座初演の歌舞伎を讀本浄瑠璃化したもの。奈河亀助作。大坂大津屋溝口治郎右衛門版。現在では「はでくらべ」の読みが付される。全五段の内、上巻には二段目までを収める。巻頭に歌舞伎の役人替名（配役）・巻末に浄瑠璃太夫の連名が載る。近松門左衛門の『惟喬惟仁位諍』や『井筒業平河内通』の影響を受けた作。下巻三段目には、相愛の豆四郎と信夫が夫婦となり、「春日野の若紫のすり衣忍ぶの乱れ限りしられず」「陸奥のしのぶ文字摺誰故に乱れそめにし我ならなくに」の歌を互いの袖に書き付けて起請として取り交わす場面がある。図録8。

(二二又)

戯男伊勢物語

「九八一—九六五」
寛政二年（二七九九）刊
二二・五×一六・〇 糧袋綴半紙本五冊



頭少々禿磨作、桂中楼白瑛画の滑稽本。「たはれ男ありけり」で始まり、「粹がりや歌や連歌で誰がまあアこぼる、ものかかねならなくに」と、『伊勢物語』の第一段をもじりつつ、祇園の芸妓の現金なさまを描く。京都を中心に遊ぶ戯れ男であったが、大坂新町・伊勢古市・江戸吉原へも足をのぼす。品川宿で死期を悟る戯れ男のもとに、極楽の天人の代わりに既にこの世を去った馴染みの芸妓たちが雲に乗り迎えに来る。それに飛び乗り往生するかと思ふところで夢覚める。すべては戯れ男一睡の間の夢物語であった。大坂藤屋徳兵衛・江戸葛屋重三郎・名古屋永楽屋東四郎・京都伊勢屋嘉兵衛・吉田屋新兵衛版。図録8。

(二二又)



〔九八―一〇三四〕
〔江戸中期〕写
七・五×五・〇 糰紙札四一八枚

肉筆の絵入りかるた。上句札に物語の場面や和歌にちなんだ多様な絵を持つ。人物の顔の目鼻まで細かに描き、衣服や調度類の文様も丁寧に描写する。実際に遊びに使ったらしく、読みやすくするために札の一部の漢字にふりがなが書き加えられている。第七十五首下句札一枚を失っており、かわりに別筆で塗籠本系統の本文を記した札一枚が補われている。草花摺文様の畳紙四包に分けて箱に収められており、女性向けの品であったことをうかがわせる。このようなかるたは娯楽を通じて知識を身につけるのに適しており、上流階級や富裕層の女性の婚礼道具として仕立てられるなどした。図録4。(藤島)



〔九八―一〇七二〕
〔大正末昭和初期〕写
一三一・四×三〇・六 糰紙掛軸装一幅

山口蓬春（一八九三―一九七二）は、大正から昭和にかけて活躍した日本画家。はじめ洋画家を志すが転じ、松岡映丘を師としてやまと絵を学び、古画の学習に力を注いだ。戦後、蓬春モダニズムと呼ばれる近代的な色彩感と構図を用いた独自の画風を獲得する。本作は、画面左上に八橋と燕子花を、右下に座して右手に筆、左手に紙を持ち、遠くに視線をやる男を描く。三河国は八橋にて、燕子花を題に都に女を残し遠く旅する心持ちを和歌に詠む、第九段「東下り」の一場面。燕子花には琳派を思わせるたらし込み風の技法が用いられ、古典的画題を古画学習を通して消化したあとが見える。すっきりとした画面の中に、花の青と扇の朱が映える。図録2。(谷川)